

# 八尾歴史物語

三四巻

続・河内名所図会を訪ねて⑥ 大信寺の建物その後・後編

江戸時代の八尾別院・大信寺の建物について、前回は、その本堂が移築され、東京都港区の善福寺の本堂として利用されていることを紹介しました。

今回は、その善福寺に残る、大信寺から移築されたことを示すものについてお話しします。

本堂中央の屋根の前方に張り出した向拝と呼ばれる部分を支える柱の下部の装飾品「杵巻板」と呼ばれる銅板には、江戸時代の本堂再建の際に、この銅板を寄進した人物の名前とその在住地と考えられる「久宝寺村西町」という文字が刻まれています。久宝寺村西町は久宝寺寺内町の中にあつた町ですが、これは、大信寺がある八尾寺内町だけでなく、久宝寺寺内町にも支援者がいたことを示しています。

さらに、この銅板には、製作場所が「大坂南御堂」であると刻まれています。江戸時代の大坂南御堂は大坂における東本願寺の拠点で、寺院に関する銅製品などを作る職人が多くいました。

これらは、善福寺の本堂が大信寺から移築されたことを示す貴重な証拠です。

また、大信寺の建物で移築されたのは本堂だけではなく、山門や鐘楼などが三重県桑名市の桑名別院・本統寺に運ばれていたことも分かっています。本統寺も善福寺と同じように太平洋戦争の空襲で焼失し、戦後の復興に合わせて大信寺から移築されたようで、こちらもまた現在にその姿を残しています。

このように、『河内名所図会』に描かれた大信寺の立派な伽藍を構成した建物は、場所を変え、今もなお当時の姿を残しているのです。



▲善福寺の杵巻板  
(全体)

◀寄進した人物の  
名前や在住地が  
刻まれている

